

麻疹・風疹検査診断実施要領

医療機関の皆様へ

麻疹・風疹が発生した際の感染拡大を防止するため、迅速な届出、検査及び調査にご協力ください。

麻疹または風疹を疑う患者を診察

- ◆麻疹の届出要件となる臨床症状（発疹、発熱、カタル症状）
- ◆風疹の届出要件となる臨床症状（発疹、発熱、リンパ節腫脹）

～症状・問診情報から麻疹または風疹感染を疑うときは、診察終了前に保健所へ連絡をお願いします～

【届出】3症状全て確認できた場合は、「臨床診断例」としてただちに連絡及び届出をお願いします。

※ 検査結果が出るまで、不要不急の外出を控えること、仕事・学校は休むこと等の患者指導をお願いいたします。

北九州市保健所保健予防課 電話：522-8764 FAX:522-1025

医療機関実施検査

- ◆ I g M抗体検査
(発疹出現後4～28日目の検体が望ましい)
または、
- ◆急性期と回復期の I g G抗体検査
※急性期と回復期の間隔は2週間程度

※3症状は確認できないものの、主治医が麻疹・風疹のおそれがあると判断する場合も、医療機関での検査をお願いいたします。

※ I g M抗体検査結果が陽性または、I g G抗体検査陽転または抗体価の有意の上昇を認めた場合は、「検査診断例」として届出をお願いします。

行政実施検査（遺伝子検査）

発疹出現後7日程度までの下記の検体の確保をお願いします。

(1) 尿 (10ml)

⇒滅菌スピッツ管に採取し、密栓する。

(2) 咽頭拭い液（鼻腔でも可）

⇒①滅菌のスワブで

咽頭または鼻腔を拭う。

②①を滅菌スピッツ管に入れ、滅菌生理食塩水または滅菌精製水(1ml以下)を入れ、密栓する。

(3) 血液 (2ml程度)

⇒抗凝固剤 (EDTA) 入り採血管

※ヘパリン入りは不可

検体は、4℃以下の冷蔵で保管してください。

次頁参照

北九州市保健所へ連絡

保健所が検体回収に伺います。

【保健環境研究所】遺伝子検査実施

検査結果を総合的に判断

※検査の結果、麻疹・風疹が否定された場合は、発生届の取り下げにご協力をお願いいたします。

麻しん・風しん検体採取の説明

検査項目	検体の種類	説明	使用する容器等
麻しん 風しん	血液(全血)	血液一般(末梢血検査)用のスピッツに血液を2ml採取する。 ※ <u>ヘパリン入りは不可</u> 冷蔵保存。	血液一般(末梢血検査)用のスピッツ ※EDTA2K又は2Na入り ※キャップが紫色のことが多い 
	咽頭ぬぐい	滅菌スワブで、咽頭又は鼻腔をぬぐい、拭った滅菌綿棒を下にして入れ、滅菌スピッツに入れ、滅菌精製水または滅菌生理食塩水1ml入れ浸漬し、密栓する。 ※ <u>スワブ(綿棒)が長い場合は、容器の長さに合わせて切る。</u> ※蓋口をパラフィルムで巻く。 冷蔵保存。 ※注意:細菌培養用の容器は使用不可	滅菌スワブ(代用品としてインフルエンザの抗原検査等に使用する滅菌綿棒)  スワブ(綿棒)がスピッツに入らない場合は短く切る 滅菌スピッツ  アウトキャップ インキャップ ※検体容器はアウトキャップ(スクリュー式でスピッツを覆う蓋のタイプ)が望ましい ※注意:細菌培養用の容器は使用不可 (蓋に綿棒が固定され、容器の底に固形物があるもの) 
	尿	滅菌スピッツに尿を5ml~10ml入れ、密栓する。 ※蓋口をパラフィルムで覆う。 冷蔵保存。	滅菌スピッツ  アウトキャップ インキャップ ※検体容器はアウトキャップ(スクリュー式でスピッツを覆う蓋のタイプ)が望ましい

※3検体は液体のため、それぞれの蓋をパラフィルムで巻き個別にビニール袋に入れて、冷蔵保存してください。